

府中かんきょう 市民の会

NPO法人 府中かんきょう市民の会々報
2008年 秋号 10月8日発行/季刊
発行人：竹内 章
連絡先：府中市分梅町 1-20-3
TEL 042-364-3428

田んぼの学校 2008

田んぼで 虫取りしたよ！



本格的な夏シーズン到来で朝から気温がぐんぐんと上がったが、保護者を含む生徒43名が元気に参加して「田んぼの学校第4回」が始まった。

イネの成長は順調で、この日は草丈と分げつ数調べ。そしてイネの花の観察だ。イネにつく虫を網でとる「虫とり」と、「かかしづくり」で古着を組み合わせたたり、楽しい顔描きも…。

イネの害虫、益虫、ただの虫、それに「アメンボどうして水に浮く」も勉強したよ。

(第4回 8月2日)

Citizens' eye
Watching...
市民の目

15

過剪定で枯死した 中学校のケヤキ

8月の強い日照りのもと、サルスベリが咲いています。しかしその隣の大きなケヤキは葉を茂らせていません。よく見ると、太い幹に不釣り合いな細い枝が残されたままです。

ここは府中市立第二中学校の校庭。グラウンドの東側に植えられているケヤキはとても良く育っていたのですが、今年の冬の剪定によって、このケヤキは枝葉を伸ばすことが出来ずに、このような無惨な姿となってしまいました。太い幹を覆う表皮はひび割れ、いまにも剥がれ落ちそうです。

前回の東八道路のケースでも過剪定が問題でしたが、やはり市教委管理下でも同じ問題が起きてしまいました。予算不足、業者まかせに原因がありそうです。校庭の緑は緑化とともに春先のグラウンドの砂の近隣への飛散防止の役割も果たしています。



本会報夏号（7月9日発行）で“畑の学校”の開設をお伝えし、総勢21名…今日まで一人も脱落者がいない…のファームメイトが学校の基本方針に沿って、試行錯誤しながら各種野菜を栽培し、収穫できました。その成果の喜びをみんなで実感しようと“試食懇談会”を実施しました。ここに至るまでに各種の苦労や喜びを率直に述べていただきました。（竹田 勇）

まずまずの収穫 畑の学校



初めての収穫物を前にファームメイトはみんなニコニコ（8月10日）

市民農園では得られない楽しさ 柿木 正夫

援農ボランティア2年目、府中市民農園経験2年目の農業未経験者素人の私も諸先輩、農業経験者の輪に入れていただき、畑の学校の主旨「①循環型農業をめざす。②共同作業で種まきから収穫までを体験する。」に則り、野菜作りステップアップを目指しました。

私はAさんと2人で1区画（約10坪）を任せられ、南瓜とネギを担当することになりました。今春夏の成果を先に報告しますと反省の多い半年でした。

まずは南瓜の苗づくりでは種まき後、苗の生育が不調で数量確保ができず（2苗）、さらに苗がひ弱で定植後もうまく生育しなかったこと。急遽、苗を2苗購入し定植しましたが時期が若干遅れ、元気さに欠けたこと、収穫は結局2個でした。

10坪の畑に南瓜4苗では到底、畝が埋まらず、仲間が見かねてインゲン、ズッキーニ、オクラ、マクワウリの苗を提供してくれ、賑やかさを演出しました。隣の芝生はよく見えるではないですが、仲間の区画は所狭しと各種野菜が青々と成長しているにも拘わらず、わが区画を見るにつけ、申し訳ないやら、情けない気分になりました。

ズッキーニ、マクワウリの収穫は少量でしたが、幸いインゲン、オクラは順調でオクラは今も連日きれいな花と収穫を楽しませてくれています。（オクラの向こうはそばの花です。）

野菜作りの難しさを再認識しましたが、畑の学校は楽しみながら野菜作りのイロハを周りの皆さんから教わる貴重な学びの場になっています。

また共同作業の畑の学校は個人で栽培する市民農園では得られない楽しさがあります。栽培する野菜の種類が多く枝豆、トウモロコシ、モロヘイア、うまい菜、きゅうり、トマト、ネギ、オクラ、マクワウリ、春菊、人参、さつまいも、キャベツ、小松菜、スイカ、フダンソウ、ベカナ、レタス、ニガウリ、ジャガイモ、シシトウ、ピーマン、カブ、チンゲンサイ、丘ヒジキなど、その野菜の旬を知り、新鮮野菜の美味しさ、地場野菜の大切さを再認識したこと、また丘ヒジキ、うまい菜など新しい野菜を知り、かつ各家庭の調理方法を相互に情報交換ができ、新しいメニューも増えたことで

新鮮野菜のお土産、調理情報が増え、家内からの評価が高くなったことは大きな収穫です。

酷暑の8月10日には仲間全員、地主さんも集い、試食会が開催されました。朝から小一時間収穫、雑草取りに精を出し、その後、事前に茹で上げたトウモロコシ、枝豆、とりたてのスイカを囲み舌づつみ。スイカはひと汗かいた後の身体には最高の味でした。

秋野菜、来年度の取り組みが始まりますが、種まき時期を大切に、畝作りに労を惜しまず、特に来年は

①南瓜の種まきから収穫への再挑戦

②10坪の区画を1年中各種野菜で埋め尽くすことを目標にして、さらなるステップアップを図りたいと思います。

そして、実が10cm程になった後一気に大きくなったのには驚きました。「ししとう」「ピーマン」は苗の段階では弱々しく、元気に育ってくれるのか心配でしたが、7月末になって順調に育ち想像できなかった大量の収穫で二度ビックリでした。そうすると畑に出掛け今日はどうなっているだろうか、元気に成長しているだろうかと見るのが楽しみになりました。

8月10日の試食会では他の畑でとれたトウモロコシ・枝豆・トマトが盛り沢山ならび、その中に堂々と存在感を出していたのが見事に育ったスイカでした。そのスイカの美味しさは暑い日の皆様の喉を十分に潤してくれたようで大好評でした。

自分達で作ったスイカを自分の手で包丁を入れるなど



夏の日差しを受けてそれぞれ立派に育つ野菜

ということは考えもしていなかったので感無量でした。

また、トウモロコシ・枝豆はちょっと収穫時期が遅かったとの講評がありましたが自分達の作品という、これ以上の美味しさはなく完食しました。

農作物を作る事の大変さ、天気との戦い、体を使い汗をかいた後のすがすがしい気分など、生きるための基本的努力を畑の学校で教えていただきました。

これからは、土に触れ、心をこめて手間暇を惜しまない、自然に逆らわない手作り菜園を楽しんで行きたいと思います。

土いじりは好きなほうでは・・・ 鈴木 扶美子

私は土いじりはあまり好きなほうではありませんでした。庭の草でさえよほど見苦しくなるまで放っておいてもなんとも思わない人でした。

不思議なもので4月に畑の学校が始まって、みんな一緒に草取り・堆肥を混ぜて土作り、そしていよいよ苗を植え菜園作りが始まりました。それ以来畑の草も目に付くようになり、他の畑はどうなっているのかどんな作物が成長しているのか、ついつい立ち止まって見るようになりました。

私達の必須科目である「ししとう」「ピーマン」はなかなか発芽しなかったのも、スイカの苗・ジャガイモの種を植えました。スイカは花が咲き小さな実を付けたのを見つけたときは得もいわれない嬉しさを感じました。



見事に花咲いたソバ



今年は、7回目

今年で7回目となる小川の生き物調査は、例年より早い8月3日(日)に午前9時半四谷文化センターに集合して、四谷4丁目の用水で行われました。

四谷地区は府中市のなかでも田園風景が色濃く残されている地域で、是非これからも、いまの環境を守ってゆきたいものです。

一般参加者は保護者・子どもあわせて21人で、それぞれ網、魚入れをもって、うれしそうに用水に向かいました。

はじめに皆川講師(東京農工大学院卒)の魚のとり方の指導があり、その後用水に入りました。

3年前から用水の取水方式がポンプアップ式に変えられたためか、とれた魚は以前より小さくなりましたが、今年とれた魚はアブラハヤ45尾、オイカワ33尾、その他32尾、合計110尾で種類は11種が確認されました。また、相変わらずザリガニが多数とれました。

昼食は四谷文化センター会議室でとり、午後からは皆川講師から用水の歴史、住民と用水のかかわり、魚の生態、環境への影響などについてイラストを使って分かりやすい説明がありました。

さらに当会の野口講師、「多摩川水辺の楽校」の阿部講師による「魚の上手な飼い方」についてのQ&A解説も行われました。

自宅で魚や昆虫を飼育している家族も多く、魚の病気への対策、水槽の大きさと魚の数などについての活発な質問もありました。

参加した保護者からは、府中市にこのような田園地帯が残されていた驚きと喜びが述べられ、別の保護者からは自分が幼い頃、故郷で経験したことを子どもと一緒に味わうことができたことへの感謝の言葉もありました。

子どもたちは、用水の流れが早いのに魚がすんでいる驚きや、はじめて用水に入れた喜びを語りました。

用水の水量が例年より多く、万が一の場合を想定し、保護者とスタッフが十分に注意した結果、幸い無事故で終了できたことは何よりでした。

参加者からは来年も続けてほしいとの希望もあり、実施時期及び魚とりの他にテーマも検討して準備することになりました。(高橋和夫)



8月の定点観測 多摩川の野鳥と植物

多摩川の野鳥と植物の、月例定点観測に参加するようになって、5年になります。観測結果は、大沢会員、野口会員によって夫々整理され、府中市環境安全部に報告されています。

たいへん地道な活動ではありますが、平成18年度からは、市の「府中の環境」に、その記録が掲載されていて、これが10年も蓄積されれば、立派な動態調査になるものと思われます。

そして今年も、猛暑の中、会員有志による8月の定例調査が行われました。

8月の野鳥

8月の野鳥の調査は、11日に、参加者6名で行われました。連日の猛暑で、「いこいの森公園」には、いつもの鳥達の鳴き声がありません。ハシブトガラスの幼鳥が巣立って、親に餌をねだっていました。

大丸堰に出ると、炎天下の多摩川は、本流までもが涸んで見え、岸辺の魚影も少ないようでした。イソシギが3羽、堰の石柱上で羽根を休めていました。川筋のダイサギ、コサギ、アオサギ、カイツブリ等の水鳥たちも、あまり動きません。

背丈より大きくなったオギ原の上をツバメ、コシアカツバメが旋回していました。いつもは忙しいセッカの声が、心なしか小さく聞こえました。

オギ原をかき分けて進み、読売新聞社の下で観察を終りました。

この日確認できた鳥は、下記の通りです。いつもより、4～5種類少ない数でした。

カイツブリ、カワウ、ダイサギ、チユウサギ、コサギ、アオサギ、トビ、イソシギ、キジバト、ツバメ、コシアカツバメ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、セッカ、ホオジロ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、外来種ドバト、家禽アヒル

以上21種+2種（羽数省略）

8月の植物

8月14日、7名の参加者で観察会が行われました。この日も猛暑の一日でしたが、立秋を過ぎて間もなくの、多摩川河川敷には、カワラナデシコが咲いていました。

6月には花粉症が心配された河川敷一面のイネ科植物も、8月は結実の時期を迎えています。この植物の観察は

正式には、「多摩川の植物・開花結実調査」と言い、夫々の植物に蕾があるか、花をつけているか、結実しているかを、つぶさに調べ、科目ごとに整理してゆきます。

8月に目立った花はキク科の植物に多かったのですが、なんと云っても多いのは、やはりイネ科の植物でした。このグループには、シマスズメノヒエ、キシウスズメノヒエなど、識別の難しいものがあり、野口さんを悩ませています。

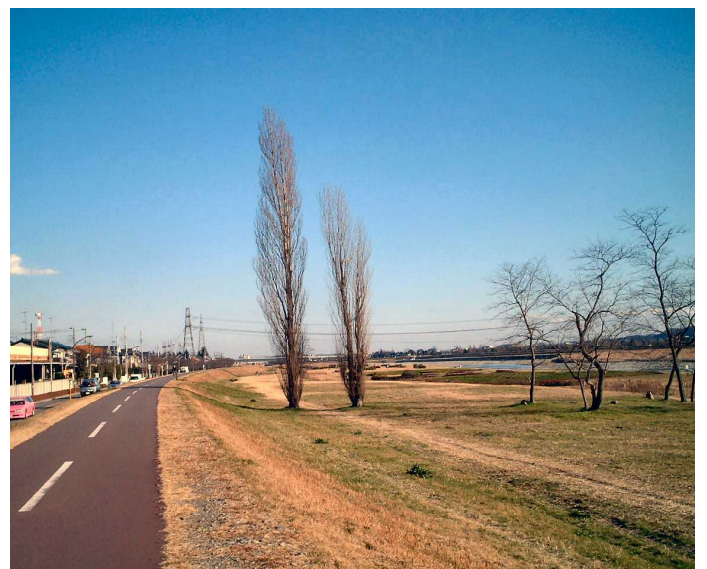
観察された全72種のうち、キク科と、イネ科は次の通りです。

キ ク 科

コセンダングサ、ハルシャギク、オオアレチノギク、ヒメムカシヨモギ、ヘラバヒメジョオン、ホウキギク、タチチコグサ、オニノゲシ、オオブタクサ、セイヨウタンポポ、ノボロギク、ノゲシ、ハキダメギク 以上13種

イ ネ 科

セイバンモロコシ、クサヨシ、オニウシノケグサ、イヌムギ、シマスズメノヒエ、キシウスズメノヒエ、シナダレスズメガヤ、オヒシバ、メヒシバ、イヌビエ、エノコログサ、ノシバ、ジュズダマ、カタバエノコロ、オオエノコログサ、ウシノシッペイ、コスズメガヤ、イヌビエ 以上18種



多様な生物が確認された多摩川の広い河川敷と周辺空間

（本稿は、大沢会員、野口会員の8月調査報告に基づいて、柊島がまとめました。調査報告中の植物に蕾があるか、花をつけているか、結実しているかについての観察結果については省略しました）

ケヤキ並木景観台なし 高層マンション計画

ケヤキ並木沿いの府中町1丁目、スーパー丸正跡地に、住友不動産が計画する高層マンション問題が浮上。周辺住民で組織する「府中のけやきを守る会」はケヤキへの日照や風が遮られる等、並木の景観に配慮するよう見直しを求めている。当初の「高さ44.97m、南北外壁55m、14階建て」の構想を「39.07m、12階」に修正したものの、依然としてケヤキ樹高20mの約2倍の高さで、景観形成基準の「並木に面する壁面を分節化等、長大な壁面を避け、圧迫感の軽減を」にそぐわない巨大な壁面はそのまま、その上ケヤキへの午前中の日照は犠牲になると主張している。

府中駅「南口A地区再開発」ではケヤキ並木に配慮し、25m⇒35m⇒60mと階段状ビルを計画している。再開発は市が関与する事業であり、この事例に倣うよう同社に再考を促したという。

先に開かれた公聴会では、北隣のビルの高さ39.07mと同じにしたので、スカイラインを守っているとの事業者の言分だが、それは条例の真意を曲解していると、そしてフォーリス(伊勢丹)の高さは約18mで、ケヤキ並木と調和しており、景観形成基準のスカイラインは、これを基準にすべきであると陳述している。

一方、事業者に対する交渉と並行して、市長への要望並びに市議会にも陳情を提出するなど、全市民的な運動にし、貴重な財産を後世に残せと署名も呼びかけている。

最重要課題

府中を代表する景観地区保全

平成16年、景観法制定に基づき、府中市は景観条例と景観計画を改定した。東京都では世田谷区に続き、多摩地区では、初の景観行政団体となった。今年4月からは独自に景観行政の運用を開始し、その取り組みはいま、各方面から注目されている。

景観計画では「市民の思いを大切にした中心部の景観を」、「市民の心のよりどころである大国魂神社やケヤキ並木と調和する、歴史と文化の奥行きのある府中駅周辺の景観づくりを」と謳われ、重点的な景観形成を図るため、「大国魂神社・けやき並木周辺」を「景観形成推進地区」に指定し、高さ、規模や形態などの景観形成基準を定めている。

また、景観行政と並行して、国指定天然記念物「馬場大門のケヤキ並木」の保存対策のため植生管理の専門家である東京農工大学をはじめ、専門家による検討委員会を立ち上げた。

文化庁天然記念物部門文化財調査官や東京都文化財保護係(学芸員)の助言を受け、4年間にわたる調査・検討をふまえて、今年2月、樹木診断調査、立地環境(土壌、水環境)、社会的条件(土地利用、道路交通)などの課題を整理した調査報告と併せて将来を展望する「保護管理計画」を答申した。それを受けて、現在「保護管

理計画策定委員会」が設置され、50～100年後の並木像に向けて、具体策に着手している。

行政手腕の発揮に期待

「府中のけやきを守る会」の主張には説得力があり、全面的に賛同できる。ケヤキ並木は周辺住民のみならず府中市民の共有財産であり、その行方が注目されている。

事業者は最高レベルの「億ション」を計画しながら、ケヤキ並木保全には消極的で、その景観性、快適空間を自己利益のための宣伝文句にするのは勝手すぎないか。企業利益の追求まで否定するつもりはないが、働く人や地域生活を豊かにする大義が、今問われているのではないか。地域社会への貢献、自然保護、環境配慮をどう果たそうとしているのか。

新たな景観行政をスタートさせた府中市は、法や条例上の規制数値がなければ、開発規制はできないなどと短絡的姿勢は取るべきではない。市民、行政、事業者が徹底的な話し合いを積み重ねて、解決策を導き出す努力が求められている。どんなにすばらしい新しい仕組みや、条例や景観計画があっても、それを駆使・活用する行政手腕が伴わなければ、実効ある解決には至らない。景観行政団体の真価が問われている。

本事案を、このまま認めるような事態となれば、今後も、マンション建設等が予想されるだけに39.07mの高さが基準となり、条例や計画は画餅に帰する。景観審議会の意見を踏まえ、最終的に助言内容を検討するとしているが、傍聴のあり方、審議会会議録の公開・透明性など市民対話は不十分だ。市民財産を乱開発から守る点では、行政と市民は認識を共有できるのであり、市民との協働・協力関係を望みたい。(まちづくり・景観問題プロジェクト/2008.9)



本多錦吉郎が描いた「景色」と題する府中のケヤキ並木
明治31年(1898年)・油彩 府中市美術館蔵

西府湧水 急速な減水の兆し



で見ると次第に降水量に対する吐水量が減ってきています。

期 間	吐 水 量
2005年5月から1年間	0.129 ㍓/分
2006年5月から1年間	0.091 ㍓/分
2007年5月から1年間	0.063 ㍓/分

(注) 各年の降水量に対する1分間あたりの吐水量を算出

継続した調査活動から、西府町1丁目の市街化の影響をもろに受けているものと思います。住宅の庭と畑が激減し、特に集合住宅はコンクリートまたはアスファルト舗装で覆われてきています(写真下 雨水浸透を阻む1事例)。

透水性道路も早急に

今後ますます住宅建設が予想されますので、雨水浸透ますの積極的な設置が必要です。また同時に新駅建設に並行して、透水性道路に切り替え、回復困難な住宅周辺の不浸透性を補うべきだと考えます。

崖線の緑を守ることと同時に貴重な湧水を保全することは府中の環境基本計画の中でも謳われており、また水循環を学ぶ重要な資源でもあります。最近、御瀧神社の湧水復活の動きもある中で、今まさに水量が減りつつある西府湧水を枯渇させないことは、府中にとって稀少な自然を守るという観点からも重要視されるものではないでしょうか。

(西府崖線を守る会)

緊急な対策を！

府中崖線に存在する西府湧水は、東京の名湧水57選の一つでもあり、今では府中に残された唯一の湧水となっています(写真 主吐水口)。

ここ3年ほど崖線の下部で吐水している吐水口から水量などを測定してきて、気付いたことがあります。

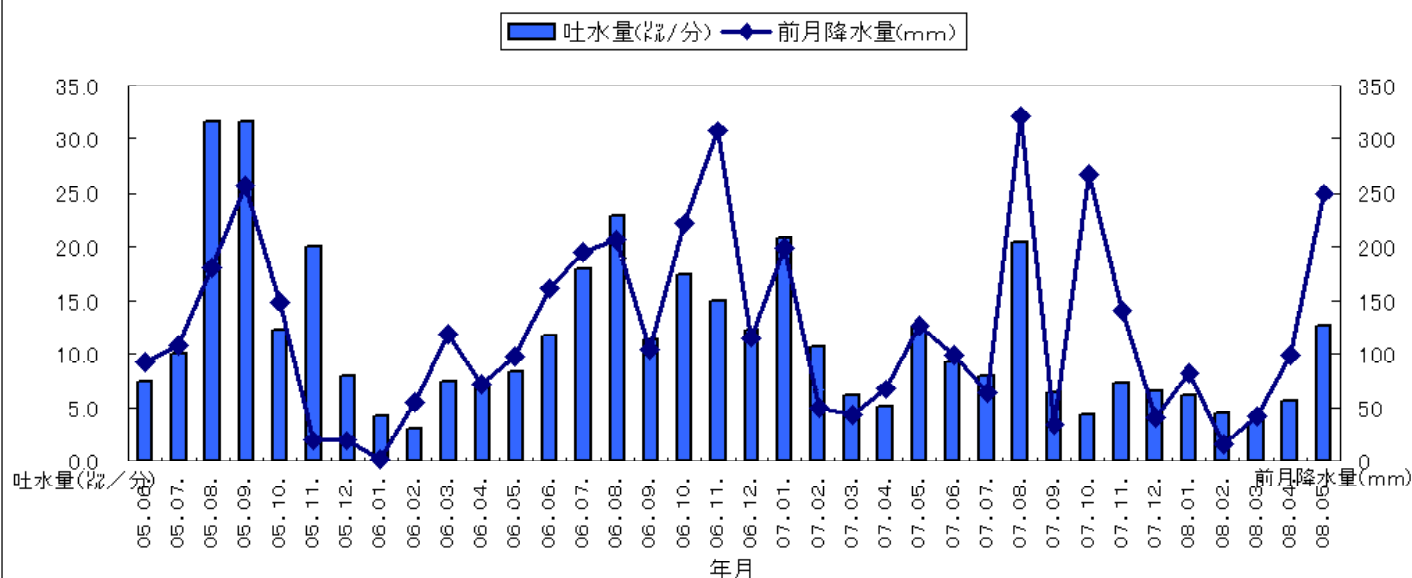
それは、急速な減水の兆しがあることです。そしてこのことは、新駅建設に伴う市街化と関連あると考えられます。

吐水量と降水量の関係は、図のように降水量が多いと吐水量も多く当然のように見えますが、1年毎の期間



出典データ:「府中の環境」

吐水量と前月降水量





多摩川にもどってきた ツバメの大群

四谷小前の河川敷で

多摩川にツバメの集団ねぐらが戻ってきました。「ツバメの集団ねぐら」とは、南にわたる前のツバメが、毎晩眠るために各地から集まってくる自然の営みで、ねぐらの場所は四谷橋の東、四谷小学校南側の多摩川河川敷です。6月頃から徐々に増えてきて、8月上旬がピークになります。この時期に合わせて6月から8月まで私たち府中野鳥クラブは毎週月曜日に観察をしています。

アレチウリ抜き取り作業の成果？

実は2006年、2007年にはツバメの群はほとんど見られませんでした。アレチウリのツルがヨシにからみついて倒しツバメのとまり場所を奪ったのです。そこで当クラブは、四谷付近の方々などの支援もいただいて、アレチウリ「抜き取り作業」を行いました。2006年の様子は、昨年春号に記載しています。

ツバメの集団ねぐら復活

昨年秋の台風による大水は河川敷のホームレスの救出騒ぎがありましたが、アレチウリとその種子を洗い流すとい

う幸運にも恵まれて、今春のヨシは立ち上がりました。そして、今年6月からツバメは徐々に増え始め8月3日には3万羽を越えました。

夕焼けをバックにツバメが乱舞

今年の関東花火大会は多摩川の上流の大雨で中止になりました。花火大会予定日の翌日8月7日夕方、久しぶりの快晴に誘われ、四谷橋下流の河川敷に行ってきました。夕焼けが美しく、快晴の夕空に乱舞するツバメは3年前を思い出すに十分でした。

定期観察日の8月3日には3万羽以上が集まってきましたが、この日は、それを越えていたように思います。特に、ほとんどがねぐら入りをした後からも、上空に双眼鏡に入らないほどの群が続々とやってきて、上空に渦巻いて飛び交い、ヨシ原にすでにとまっている先行群の隙間を捜しているかのようでした。以下、時刻を追って再現してみますと…

18時40分頃、集まり始める。ヨシ原すれすれにツバメの群は次々とやってきて、ヨシ原の上側が黒くなるほどに。

18時50分頃 ヨシの葉に止まり、ねぐら入りを始める。まるでイナゴの佃煮のよう！

19時05分頃 ヨシ原の上を飛び回っている先発ツバメ群はほぼねぐら入りを完了するも、未だソワソワしている気配が伝わる。後発ツバメ群は上空で旋回して、ねぐらを探しているようだ。

19時15分頃 上空に旋回していた群も見えなくなる。ねぐら入りしたツバメはまだ落ち着かない。

とにかく、驚嘆の30分でした。高感度カメラがあったら上空に乱舞する集団をお見せできたのに！

(府中野鳥クラブ 田中 正仁)



眠る直前のツバメたち。懐中電灯の光が反射して目が輝く。

写真提供：府中野鳥クラブ